様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２８６０

研究課題名（和文）近世東北地方における自然資源の利用・管理と地域社会に関わる歴史学的研究

研究課題名（英文）Study on utilization and management of natural resources and rural society in the Tohoku region in the Edo era

研究代表者
高橋　美貴（Takahashi, Yoshitaka）

東京農工大学・（連合）農学研究科（研究院）・教授

研究者番号：９０２８２９７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　研究代表者は水産資源を分析素材として近世日本における自然資源の利用と管理に関する歴史学的な研究を進めてきたが、史料分析の進展や近年の科学的知見の豊富化を背景に、水産資源の変動が後背地に拡がる森林と深いつながりを持つことが分かってきた。本研究では、①近世の東北地方、とくに仙台藩北部をフィールドとして沿岸部における漁況の変化を意識しながら森林資源の利用や管理の変遷を追跡するとともに、②同じく後背地に豊富な森林資源をもつ伊豆半島（現沼津市内浦湾沿岸地域）を事例とした分析を①との比較も意識しながら行った。研究期間内に、①については書籍１冊と３回の一般向け講演を、②については論文２本を成果として得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年、河川上流地域における森林資源の状態が河川を介して下流地域や沿岸部における漁業資源に影響を与えることが指摘されている。近世でも河川を介した下流地域や沿岸部への土砂流出とそれによる不漁が問題になることを確認でき、流域史的な広がりを意識しながら、中上流域における森林資源の利用・管理の歴史的変遷を捉えることが求められている。また、沿岸の後背地に拡がる森林は、ダイナミックな漁況変動を繰り返す漁業の不安定性をカバーする生業基盤として重要な役割を果たしてもいた。本研究は、近世の東北地方（とくに仙台藩領）と伊豆半島（沼津市内浦湾沿岸地域）を事例として、このような論点について実証的に迫ったものである。

研究成果の概要（英文）：I have conducted historical research on the utilization and management of natural resources in early modern Japan taking fishery resources as an instance. And, it has become known that fluctuation of fishery resources is related to the condition of hinterland forests through analysis of historical documents and increase in scientific knowledge. In this study, the following two investigations were conducted. First, I analyzed the history of the use and management of forest resources in the Tohoku region, especially in the northern areas of Sendai Domain after the late 18th century, taking into account the deceasing of the fish catch in the coastal area. Second, I analyzed the history of the use and management of forest in the coastal area in Izu Peninsula, taking into account the fluctuation of migratory fish such as bonito, tuna and so on. During this research period, I published one book and two papers in addition to having lectures for the general public three times.

研究分野：日本近世史

キーワード：自然資源の利用と管理　山林　水産　史料保全　日本近世史　地域史　流域史

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、水産資源を主な分析素材として、近世日本における自然資源の利用と管理に関する歴史学的な研究を進めてきたが、その過程で、水産資源のみをとりあげて自然資源の利用と管理に関わる地域史研究を進めることに問題点も感じてきた。日本列島の沿岸地域にとって、後背地あるいは河川上流部に位置する森林が大きな役割を果たしていたり影響を与えたりしていることが、この間の研究などを通して分かってきたためである。たとえば、近世後期の三陸沿岸部におけるサケ漁に関わる史料を見ていると、上流地域からの土砂流出によって河川下流域の河床や河口沿岸地域の海底が浅くなることが問題化していたことを示す史料が散見される。藩にもこのような事態を認識する官僚が存在し、上流地域の山林伐採の進行などがその原因として意識化されてもいた。上流地域における森林資源の状態が、河川を媒介にして河川下流域あるいは沿岸部における漁業生産に影響を与えていたことが推測されるし、実はそれは水産学など自然科学の分野でも近年指摘されている事実でもある。

また、日本列島の沿岸部を見ると、平地から広い砂浜海岸を介して海へと拡がる地域よりも、沿岸の後背地に森林をともなう丘や山を抱える地域が思ったよりも多いことに気が付く。三陸沿岸地域や伊豆半島などは、その典型である。これらの地域では、沿岸部や河川下流域における水産資源を生業基盤のひとつとする一方で、後背地の森林資源が地域住民の生業・生活を成り立たせるための薪炭などの商品生産空間などとして無視できない役割を果たしていた。つまり、近世日本における沿岸部の地域社会には、海川と結びついた生業世界とともに、森林と結びついた生業世界が併存していることが少なくなかったのである。実際、日本の沿岸地域に残された近世史料を見ていると、思ったよりも森林利用に関する史料が多く残されていることに気がつく。

こうして、水産資源の利用と管理に注目しつつ地域史研究を進める際にも、単に水産資源のみを対象にした関係史料のみを俎上に据えるだけでは不十分なことが分かってくる。目線をいま少し広く取り、(1)沿岸地域における森林資源の利用・管理や、(2)河川上流域に位置する内陸部の森林資源の利用と管理などの問題にも目配りをしながら、研究を進める必要がある。以上が、本研究開始当初の問題関心・視角である。

２．研究の目的

以上のような問題関心のもと、本研究では、その目的を次のように設定した。

申請者はこれまで、水産資源を主な分析素材として、近世日本における自然資源の利用と管理に関する歴史学的な研究を進めてきたが、その過程で、沿岸地域の生産や成り立ちに、後背地や河川上流部に位置する森林が影響を与えていることが分かってきた。自然資源の利用と管理をめぐる沿岸部地域史の構築という課題に迫るためには、目線をいま少し広域的に取り、(1)沿岸地域の森林と(2)河川上流域に位置する内陸部の森林双方の利用や管理のあり様に目配りをしながら分析を進める必要がある。本研究の目的は、仙台藩や伊豆半島を主なフィールドとして、沿岸地域と内陸地域の二地点に拠点を作り、このような課題に迫ることである。

３．研究の方法

前述したように、本研究では、漁業など沿岸地域の生産活動や地域の成り立ちに後背地や河川上流部に位置する森林が大きな影響を与えていることが分かってきたことを意識しつつ、(1)沿岸地域の森林と(2)河川上流域に位置する内陸部の森林双方の利用や管理のあり様について史料収集とその分析を進めることを目的とした。そのような作業を通して、沿岸地域における自然資源の利用・管理の歴史を地域史として、より深めることが、その狙いであった。

このうち、(1)の視点、つまり沿岸地域における森林利用については、いずれも沿岸部に漁業生産の拠点を抱える一方で、その後背地に山林を抱え、なおかつその山林が一定の経済的機能を有している地域が分析対象地としてふさわしい。本研究では、まず、このような条件に合致する地域として、①三陸沿岸地域、とくに旧仙台藩牡鹿郡から桃生郡にかけての沿岸地域を分析対象地として設定した。この地域については、「桃生郡名振浜永沼家文書」のほか、東日本大震災後の史料レスキュー活動のなかで保護された「牡鹿郡女川町木村家文書」「同町丹野家文書」「同町須田家文書」などを利用して研究を進めた。「桃生郡名振浜永沼家文書」については2011 年東日本大震災に際して流出・消滅してしまったが、（一部未撮影分を含みながらも）ほぼ全点の写真画像データが残されており、研究素材として利用可能な状態となっていた。また、後三者については、震災にともなう流失などの被害も被った史料もあるが、宮城歴史資料保全ネットワークの活動によって画像データの閲覧が可能となっていた。いずれも森林資源に関わる史料を少なからず含んでおり、本研究の分析素材としてふさわしい。これらの分析を、震災後の史料保全活動ともリンクさせつつ被災地域の歴史を掘り起こすための地域史研究としても深めることを試みた。

また、①地域との比較を意識し、後背地に森林を抱える沿岸地域として、②豆州内浦湾沿岸地域（現静岡県沼津市内）をいまひとつの分析対象地として設定した。当該地域における自然資源を利用した生業は、マグロ・カツオなどの回遊資源を対象とした漁業、薪採取などの山稼ぎ、自給的な農業の３つから成った。この地域の特徴は、近世にける大部の史料を残すとともに、その史料から、漁業の漁況に応じて森林資源を利用した山稼ぎや農業のあり方が変動する様子を復元することができることにある。①地域での分析が、〈後背地や内陸部にある森林資源

の状況が漁業にどのような影響をもたらすのか〉という視角からのアプローチであるとすれば、②地域での分析は、〈漁業資源の変動（漁況変動）が後背地の森林資源にどのような影響をもたらすのか〉にアプローチするものということになる。幸い、当該地域については、この地域に残された大量の近世史料を活字化・収録した澁澤敬三編著『豆州内浦漁民資料　上・中・下』が日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書　第一五～一七巻』（三一書房、一九七二～一九七三年）として刊行されている。この史料に、沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編『沼津市史　史料編　漁村』（沼津市、一九九九年）、沼津市歴史民俗資料館編『沼津市文化財調査報告第９集　沼津内浦の民俗』（沼津市教育委員会、一九七六年）など、その他刊行史料を組み合わせることで、前述した課題にアプローチしうる情報量を調達することができるであろうとの見通しを持っていた。⑴－②地域に関する分析は、これらの史料を用いて進めた。

一方、(2)の視点に関わる分析対象地としては、旧仙台藩領北部に位置する東山地域（現岩手県一関市西部）の分析を進めた。もちろん、この地域を分析対象としたのには理由がある。この地域が森林資源に富み、森林に関わる近世史料を多く残していることはもちろんであるが、いまひとつ、この地域から砂鉄川・北上川への土砂流出が近世段階から問題化していた事実を断片的ながらも史料的に掴んでいたことがあった。この地域では、「一関市大東町金家文書」（個人蔵）のほか、「藤沢町首藤家文書」（一関市藤沢町郷土文化保存伝習館所蔵）、「一関市大東町鳥畑家文書」（一関市立博物館所蔵）などの撮影・分析を進めた。

以上のような史料の撮影・収集を行いつつ、⑴沿岸部と⑵内陸地域という二つの地点を分析対象として設定し、森林資源の利用が流域的な拡がりのなかで漁業生産などにもたらす影響や水産資源変動が間接的に後背地の森林資源にもたらす影響について史料分析を行った。

なお、分析作業は、研究代表者・分担者でそれぞれ進めつつ、合同の調査・報告会・打合せを実施するという形で進めた。実施した主な調査は下記の通りである。

【2015 年度】

①6 月 21 日・7 月 26 日・8 月 29 日～8 月 31 月に、金家文書の整理・撮影作業を実施した。また、史料の一部は借用のうえ、東北大学災害科学国際研究所歴史資料保存研究分野にて整理・撮影を進めた。

②今後の研究の拡がりも射程に入れ、7 月 25～26 日には、大東町内の歴史資料を確認するための巡見を地元資料館（芦東山記念館）・地元郷土史家の方々とともに実施した。

③2 月 28～29 日には、東北大学災害科学国際研究所歴史資料保存研究分野を会場に金家文書の目録作成を合同で実施した。

【2016 年度】

①9 月 16 ～18 日に、東北大学災害科学国際研究所において、金家文書の簡易目録の作成と同家に愛する報告書作成の準備を行った。また、17 日には、史料所蔵者宅に伺い、借用史料返却と新たな未撮影史料の借用を行った。

②1 月 18～19 日・3 月 8～10 日に、東北大学東北アジア研究センターにおいて、金家文書の簡易目録の作成と報告書作成の準備を行った。

【2017 年度】

①9 月 3 日、共同研究者である高橋陽一が金家を訪問し、調査状況について報告のうえ、赤子養育に関する史料紹介を実施した。

②また、高橋陽一は、10 月～12 月にかけて、仙台市博物館にて仙台市愛子地区の旧大倉村・旧芋沢村関係史料の調査・撮影を行った。この調査は、同藩の山林関係制度の解明を意図したものである。

③研究協力者である佐藤大介が、一関市藤沢町の丸吉皆川家文書に残されていた、900 頁におよぶ幕末維新期の日誌のうち、慶応 4 年（明治元年）4 月から 12 月にかけての約 70 頁の記載について、仙台市内の市民と共同で月 1 回の解読検討会を行った。約 50000 文字の解読成果を得、戊辰戦争期の地域の動向、生糸その他の経済変動、低温や台風など環境変動に関する情報が得られた。

【2018 年度】

①6 月 21～22 日に、東北大学災害科学国際研究所に集合のうえ、代表者である高橋・分担者・高橋陽一、協力者・佐藤大介による、これまで収集した史料の概要説明と当該年度に一関市で行う調査計画、さらに今後の研究方針についてミーティングを行った。とくに一関市藤沢町・首藤家文書や同町・皆川家文書について情報交換を行うと同時に、夏期に実施する調査の準備作業を行った。

②2018 年 8 月 24～26 日に、金家に伺い、史料返却および整理状況の説明を申し上げるとともに、一関市博物館にて当該地域の大肝入を勤めた鳥畑家文書の撮影を行った。

４．研究成果

前述したように、本研究では、漁業など沿岸地域の生産活動や地域の成り立ちに後背地や河川上流部に位置する森林が影響を与えていることが分かってきたことを意識しつつ、(1)沿岸地域の森林と(2)河川上流域に位置する内陸部の森林双方の利用や管理のあり様について史料収集とその分析を進めることを目的とした。本研究では、㋐⑴⑵双方の論点に関わる書籍 1 点、㋑⑴の論点に関わる論文 2 本、㋒⑴の論点に関わる講演 2 件および⑵の論点に関わる講演 1 件を研究成果として得た。以下、順次、中身を概観する。

・研究成果㋐。2016 年に蕃山房から研究代表者・高橋美貴が単著『仙台藩の御林の社会史‐三陸沿岸の森林と生活‐』と題したブックレットを出版した。本書は、東日本大震災によって被災・焼失した三陸沿岸地域の古文書を用いながら、この地域の森林の歴史、正確には、この地域の森林空間のなかに相応の比重をもって織り込まれた御林をめぐる社会史の復元を試みたものである。仙台藩の沿岸地域に拡がっていた森林には、村むらの入会林や百姓の所持する地付山のほかに、領主の御林が無視できない比重をもって設置されており、それも地域の人びとの生業・生活に不可欠な役割を果たしていた。本書では、御林の利用と管理のあり様を明らかにすることで、沿岸地域史を山林資源利用・管理の観点から捉え直すことを試みた。また、18 世紀末以降の同藩沿岸地域で河口部での土砂堆積が問題化することを指摘し、これらの背景を探るために流域沿いに広がる森林の利用状況を含めた流域史的研究の必要性を指摘した。

・研究成果㋑。本研究では、研究代表者である高橋美貴が、①「近世における水産資源変動と山林・獣害‐豆州内浦を事例として‐」(渡辺尚志編『生業・流通・消費の近世史』勉誠出版、2016 年、399‐432 頁）および②「近世における海洋回遊資源の資源変動と地域の自然資源利用‐豆州内浦湾沿岸地域を主な事例として‐」(『日本史研究』672、2018 年、30‐60 頁）という二本の論文を発表した。これらの論文は、海洋を大規模回遊する水産資源を待ち受けて漁獲する立漁を基幹的な生業とした、近世の豆州内浦湾沿岸地域を主な事例として、数十年ごとに繰り返される海洋回遊資源のダイナミックな資源変動―とくに不漁―に対して村々がどのような対応を示したのかという観点から、海洋のみならず森林・耕地を含めた地域の自然資源利用の変容を追跡したものである。水産資源変動という自然環境の変動を起点として、海洋回遊資源の漁獲を重要な生業とした地域における地域環境史を、主に 17～18 世紀に焦点を当てつつ描いてみたいというのが、そのねらいである。この地域では、およそ 40 年ごとに繰り返される〈不漁〉が極めて大きな影響をもたらしたが、それがこの地域の歴史に及ぼす影響は複雑で、単に漁況の変動とリンクしつつ活況と不況とを繰り返すだけではなかった。それは、〔〈不漁〉→森林資源の過剰利用→獣害の増加→農耕の重視と獣害防除対策の強化〕という回路を通して、自然資源利用のあり方や村の役割の浮上といった変動を、この地域に連鎖的に促していく。近年、水産資源学では、海洋回遊資源が気候変動とリンクしてダイナミックな資源変動を繰り返すことが指摘されている。また、古気候学では、年輪や古文書を組み合わせた気候復元を通して、近世が単なる寒冷期（小氷期）ではなく、温暖期と寒冷期が約 40 年の周期で繰り返される時代であったことも指摘されている。内浦沿岸地域における立漁の漁況周期がそこで明らかにされた周期と合致していることは興味深い。論文①②は、このような周期性をもつ気候変動（それに基づいた資源変動）に対する地域の対応に迫ろうとした地域史研究の試みと位置づけることができよう。以上の検討を通して、海洋回遊資源の資源変動を踏まえた地域環境史研究は、人間社会の脆弱性にも目配りをしつつ、気候変動と社会変化の関係史にアプローチする突破口のひとつたりえることを展望した。

・研究成果㋒。本研究で収集・分析した史料に基づき、次のような 3 件の市民向け講演を行った。

・2015 年 5 月 20 日、一関市大東コミュニティセンターにて「磐井の江戸時代をほりおこす」と題した現地報告会兼シンポジウムを開催した。研究代表者である高橋美貴は、「山論史料から見える　江戸時代の東山‐境塚・山論絵図・草飼‐」と題する報告を行い、当該地域の山林資源の利用とその背後にある社会状況について調査を行った史料の紹介などを行った。

・2016 年 11 月 19 日に、東日本大震災からの復興を進めている女川町まちなか交流館において、本研究で調査・分析の素材とした史料を利用して、研究代表者である高橋美貴が「大肝入文書から見る江戸時代の女川‐村と人びとの生き残り戦略‐」と題する講演を行った。沿岸地域に住む人びとが、飢饉などの危機的状況のもとでどのような生き残りの戦略を持っていたかについて史料紹介を行った。

・2016 年 5 月 27 日、石巻市河北総合センターにて、「古文書から見る江戸時代の追波の森林と村びとたち」と題して、被災史料を用いた講演会を研究代表者である高橋美貴が実施した。2013 年東日本大震災で甚大な被害を被った旧北上町（現石巻市北上）には、かつて大部の歴史資料が旧家によって所蔵されていた。これらの歴史資料の多くは、震災によって喪失したが、本科研メンバーは震災前から当該地域で資料の調査・撮影を実施するとともに、震災後も史料レスキューに関わってきた。本講演会では、これらの資料に基づき、当該地域の森林資源利用の動向について史料紹介を行った。

・2019 年 3 月 22 日に東北大学川内北キャンパスにおいて、本研究での史料収集・分析に基づき、「山林資源と仙台藩‐18 世紀前半の史料から見る仙台藩の御林‐」と題した講演を行った。本研究調査対象地である一関市を含む仙台藩北部における山林資源の利用状況を、同藩における産業発展や都市消費の拡大にともなう燃料需要の増加と関わらせつつ整理した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

①高橋美貴、近世における海洋回遊資源の資源変動と地域の自然資源利用‐豆州内浦湾沿岸地

域を主な事例として‐、日本史研究、査読有、672、2018、30‐60
②高橋美貴、近世における水産資源変動と山林・獣害‐豆州内浦を事例として‐、渡辺尚志編『生業・流通・消費の近世史』勉誠出版、査読無、2016、399‐432

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　１件）
①高橋美貴、蕃山房、仙台藩の御林の社会史‐三陸沿岸の森林と生活‐、2016、74

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：高橋　陽一
ローマ字氏名：TAKAHASHI YOUICHI
所属研究機関名：東北大学
部局名：東北アジア研究センター
職名：助教
研究者番号（8 桁）：４０５６８４６６

(2)研究協力者
研究協力者氏名：佐藤　大介
ローマ字氏名：SATOH DAISUKE

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。